INT.　週刊 BOOM オフィス　―　昼

広くて綺麗なオフィスの中にアダルト漫画のポスターがびっしりと飾られている。予想以上に整頓されたクリーンなオフィスに感動するユマ。

受付の横にある会議エリアにユマを誘導する受付嬢。お辞儀をし、ゆっくりとオフィスを見渡すユマ。しばらくすると、茶色く染まった柔らかいパーマヘアーのロックンロールな藤本（５０）が奥から歩いてくる 。

お辞儀をするユマ。驚いた表情でユマを見る藤本。

ユマ
「初めまして 」

藤本
「どうもどうもぉ」

テーブルの向かい側に座り、足を組む。素早くユマが応募した原稿に目を通す 。

藤本
「君いいの描くよね。気に入ったよ 」

ユマ
「ありがとうございます」

藤本
「どれくらい描いてるの？」

ユマ
「小さい頃からずっとです」

藤本
「だろうね…　いやーでもやっと謎が解けた」

ユマ
「謎…ですか？」

藤本
「ユマちゃんさ、ヤったことある？」

ユマ
「えっ？」

藤本
「セックス。エッチ。ある？」

ユマ
「え…っと…
…ないです…」

藤本
「だと思った」

ユマ
「なにか問題ありますか…？」

藤本
「いやー、ダメじゃないんだけど…っていうか、うーん…」

ユマの原稿を再度手に取りページをめくる藤本。

藤本
「すごくキャラもいいし、ストーリーの方向性もかなりいい。
っていうか、めちゃめちゃいい。僕、大好きよ、これ。
ただ…」

息を飲むユマ。

藤本
「キミの作品には経験がないだよね。キミ自身の経験が。
ヒットシリーズを選ぶのにさ、やっぱリアスさが必要なんだよね。
漫画家さんの経験度というかさ。それが濡れまくった真の情熱愛なのか、
ただのカジュアルセックスか、風俗でやったか、
オナホでぬいたのか、全部わかっちゃうんだよね、僕。

ユマ
「すごい…ですね…」

藤本
「まぁ〜仕事だからね。でもユマちゃんの漫画は、ぶっちゃけ分かんなかったんだよねー。
どんな人かなって思ってたら、君は車椅子に乗った処女ときた。
っつぅか、想像力半端ないよね。そりゃわかんないわ。
あ、ごめんね、僕、正直に言っちゃうけど気にしないでね」

ユマ
「大丈夫です…

あの…一つ質問していいですか？」

藤本
「どうぞ」

ユマ
「原稿のどの辺りがダメですか？」

原稿をテーブルに広げる藤本。

藤本
「例えばさ、このキャラの表情って、ただ楽しんでるだけで、
感じてるっていう表情じゃないんだよね。
これならただの少女漫画に過ぎない」

ユマ
「どうすればいいですかね…」

藤本
「それは、君次第だよ〜。
でももしキミがさ、男でも女からでも抱かれる感触とか、
愛撫された時の感じを経験したら、もっといいのが描けると思うんだけどね」

ユマ
「ですかね…？」

藤本
「もちろんよ！　ウチもさ、これからもっと女性の読者層を
広げたくてね。キミの作品、絶対女子にウケると思うんだよねー。
ムラムラさせるシーンもっと増やしてもらって
そのあとくるセックスシーンを、ぎゃーたまんねーっていう
ものにしてもらえれば、言う事ないよね」

タバコに火をつける藤本。

藤本
「っていうかさ、ユマちゃんは、実際、プロの漫画家として
どれくらいやる気あるの？」

ユマ
「すごくあります。
私にはこれしか取り柄がないんで」

藤本
「そっか。じゃあさ、とりあえず今日は一次通過ってことに
しておくから、今のにセックスシーンをもっと突っ込んで、
いいのが描けたらまた送ってきてよ。キミのレベルなら
真面目に連載も検討するし。僕、嘘はつかないから」

ユマ
「じゃあ取りあえず…」

藤本
「あんまり考えすぎないでさ、頑張って」

ユマ
「はい」

軽く返事はしたものの、ユマの頭の中は混乱しまくっている。お辞儀をし、オフィスを出る。